

## 南足柄市立福沢小学校

研究テーマ：主体的な学びを育てる授業～学び合いから深め、実感する～

### 1、実践の目的

本校では、ここ数年「主体的な学び」を主テーマとして研究を進めている。特に3年前、コロナウイルスが世界に広がってから、中央教育審議会答申にある「予測困難な社会の変化」という文言が現実的となったことで、主テーマである「主体的」という言葉について見直しを図り、さらにこれまで以上に具体的に考えるようにしてきた。

また、市の研究主題は「夢と希望を持って、粘り強く自分の道を切り開く子どもの育成」であるが、“主体的な学び”はまさに、そこに通じていると考えている。

以上の理由から、令和4年度の本校研究テーマ、並びに副テーマを設定した。研究の教科は、職員の経験年数にバラつきがあることもあり、系統性等が見やすいという理由で、算数科に絞った。

### 2、実践の内容

#### (1) 研究仮説

学び合い等を通して、課題に対しての深まりを実感することによって、児童の主体的な学びを育てることができる。

本研究の目的は、「児童の主体的な学び」を育てることである。それを実現するための手段として、授業の中で、「学び合い」を中心に授業を計画している。また、昨年度から研究に位置づけた「ICTの活用」においても同様に、手段の一つとして考えている

ため、文言を「学び合い等」とした。つまり、研究仮説は、授業の中でこの二つの手段を効果的に用いることによって、児童が課題に対しての深まりを実感する経験をたくさん積むことができ、「主体的な学び」が育つという意味である。近年、経験年数の浅い職員が増えているので、改めて研究仮説に使用している抽象的な言葉に対する認識を確認し、共通理解を図ることによって、研究の方向性を揃えていきたいと考えた。

#### (2) 抽象的な言葉の具体化

##### (i) 「主体的な学び」

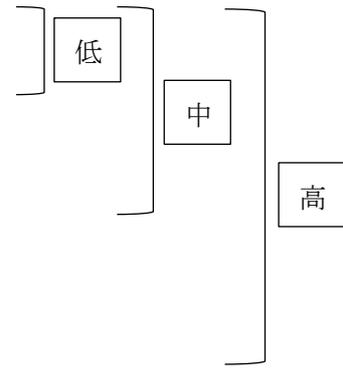
本研究では、「主体的な学び」について「課題に対して、知的な興味をもって、さまざまな方法で粘り強く結論を導き出そうとすること」と定義づけた。昨年度から、「粘り強く」というキーワードを加えた。その背景として、本校児童の課題として、困難にぶつかった際、すぐに諦めてしまうといった実態があったことと、市の研究主題にある願いが合致したことから、この言葉を入れた。つまり、「主体的な学び」が形として表れた時、この粘り強さが見られるということになる。

##### (ii) 「課題に対しての深まり」

昨年度の成果として、低・中・高学年の求める「学びの深まり」の具体を次のようにまとめた。(※『令和3年度福沢小学校研究紀要』より)

## 【低・中・高学年の「学びの深まり」について】

- ① 分からないことが分かるようになった
- ② 自分にはなかった新しい考えを知ることができた
- ③ 複数ある方法から、よりよい方法を考えることができた
- ④ 他の教科や日常生活への活用を考えることができた
- ⑤ ある考え方が適切ではないということを理解することができた
- ⑥ 2つ以上の知識を繋げて考えることができた



今年度は、上に示した「学びの深まり」の具体を指導者が共通イメージとしてもつことによって、自身や参観した授業に対して評価・検証した。

### (3) ICTの活用 ～端末の効果的な活用をめざして～

今年度も、研究の中にICTを活用した授業を位置づけた。昨年度からの反省で、そのことを目的とするのではなく、児童の学びにつながるような活用例や方法を探った。

#### (i) 小学5年生「合同な図形」での実践(7月)

授業は、「合同」の概念を理解する助けとして学習者用端末を活用した。これまでは色画用紙等を使い、二つの図形を重ねることで、合同であるかを確認していた。しかし、本単元では学習者用端末の使用を認めて活動することとした。そうして導き出した互いの考えをホワイトボード上で共有し、みんなで比較することで、「学び合い」も活発に行うことができた。思考や理解を促す役割に加え、共有が図りやすいといった利点が挙げられた。

#### (ii) 小学2年生「長方形と正方形」での実践(10月)

授業後の研究協議で改めて話題となったことは、ICT活用が効果的だったかということであった。2年生という発達段階を考えた時に、画面上ではなく、実際に自分の手で操作するなどといった活動も大事にしていく必要性について話し合われた。研究会でICTを活用する場面を互いに見合うことで、よりよい方法について引き続き模索していきたい。

## 3、実践の成果

昨年度に引き続き、年度初めに、めざす姿を共有するとともに、授業の中でも、その姿を明確にしながら研究・検証をした。合わせて、ICTの活用においても、獲得すべき技能についての系統性や活用場面を共通理解するためのカリキュラムを作成した。

## 4、今後の展開

来年度以降、実際に前述したカリキュラムを使っていく中で、修正を加え、児童にとってよりよいICTの活用についても考えていきたい。今後も授業力改善・向上をめざして研究を続けたい。